

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
98-008	ラオス周縁民族社会における国民統合の経験： サラワン県・カトゥの儀礼と社会変化		
	ラオス	ラオス国立大学	1999.9 ~
	西本 太	一橋大学大学院	院生博士

研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

社会主義国ラオスは、言語系統の異なる多数の民族集団を有し、現体制確立から 20 年余りを経て、現在それら集団の国民としての組織化を次第に推進しつつある。こうした状況において、この国民統合が国家の周縁に位置する社会の側からいかに経験されているのかを明らかにすることは、かかる国民統合の、ラオスに特有のありかたを知る上できわめて重要な手がかりとなる。このような視点を背景に本研究では、南ラオスの周縁社会における宗教的観念および儀礼の実践に焦点を当て、それらが 19 世紀末以来の植民地政府や現代の国民国家など一連の国家とのいかなる関係において、また隣接諸民族とのいかなる相互作用において形成されてきたのかを実証的データに基づいて記述分析する。

本研究がとりわけ中心的な課題として取り組みたいのは、現代ラオス国家と周縁民族との接合関係の究明である。ラオスにおける国民統合は、その民族構成比(ラオ系:非ラオ系=6:4)からしても、また非ラオ系民族が多く居住する地域(国境沿い)の安全保障上の重要性からしても、国家運営上、特別重要な意義をもつ。それゆえ、国家が学校教育や農業指導といった回路を通して提起する国民文化ないしアイデンティティは、支配民族による一方的な価値の押し付けではありえず、新たな国民像を提示するものでなければならない。他方、周縁社会の側も単なる受動的な受容者ではありえず、それらを既存の世界観や生活様式の中に取り込みつつ、儀礼などを通じて多義的な自己認識を表出している。本研究では、日常生活において中心的重要性を占める諸儀礼の実践(およびその背後にある観念世界)を、外部世界との不断の折衝の場として、かつその産物として捉えることにより、当該集団の社会変化の経験を微視的な見地において解明することを目指す。

現地調査は、南ラオス・サラワン県ボロヴェン高原以北の、首長を中心とした社会成層をもつ人口約15,000人の焼畑農耕民カトゥ(Katu)を対象とする。従来「血の狩人」として知られ、周辺地域の多民族状況(ヴェトナム側の同一民族との関係も含め)において、また国家的枠組みの中で、儀礼を通して独自の自己認識を成形してきている。